**2022年日本のテレビニュースが映す中国観
～音声と映像の計量テキスト分析から～**

1A193119-6
政治経済学部国際政治経済学科
藤内 来実

【概要】

藤内来実

2022年、日本と中国は日中国交正常化50周年を迎えた。50年を経て、現在、日本人は「中国」に対してどのような印象を抱いているだろうか。中国に住んだ経験のある筆者にとって、幼い頃からの疑問である。外務省の「外交に関する世論調査」によると、中国に対して親しみを感じている日本人の割合は僅か20%ほどだ。筆者は自身の経験より、日本人の中国に対する印象は、日本のメディアが映し出す中国の印象と類似しているのではないかと考えた。そこで、本論文では「日本のテレビが映す中国関連ニュースはネガティブ要素が強い」という仮説を立て、日本のテレビニュースが中国をどのように映しているのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、2022年6月1日から同年8月31日までの期間に「ニュースウォッチ9」、「報道ステーション」、「news zero」で報道された中国関連ニュースを対象に計量テキスト分析を行った。

本論文は5章から構成される。第1章では、3番組から抽出された中国関連ニュースの中で共通して大きく取り上げられていた中国のコロナ対策、香港返還25周年、台湾問題についての詳細を述べた。第2章では先行研究を挙げ、第3章では研究手法や分析手順を示した。第4章では、ニュースの音声と映像を記録し、それぞれKHコーダーを用いて計量テキスト分析を行うことで、中国がどのように映されているのかを検証した。第5章では、結論と課題をまとめた。

最終的に、ニュース音声の分析からは、政治や軍事に関するニュースがメインであり、ポジティブよりもネガティブな印象の強い表現がなされていることが明らかになった。ニュース映像の分析からは、「戦争」を連想させる兵器など軍事に関する事柄を映したカットが多いことが判明した。また、それらはクローズアップによって強調されており、受け手の緊張感や緊迫感を増大させる演出工夫がなされていることが明らかになった。従って、本論文では「2022年現在、日本のテレビで報道される中国関連ニュースは、『ネガティブ要素』が強く、とりわけ軍事要素を取り入れることで『危機感』を植え付ける内容である」という結論を出すことができた。